

論題	朝倉能登守夫人墓石造宝篋印塔の造立年代について
著者	斉藤彦司
掲載誌	神奈川県立博物館研究報告—人文科学— (神奈川県立博物館研究報告) 第2号
ISSN	0910-9730
刊行年月	1969 年 (昭和 44 年) 3 月
判型	JIS-B5 (182mm × 257mm)

横須賀市 寶永十三年春（一六三六）（大略図11）

朝倉能登守夫人墓石造宝篋印塔の

造立年代について

横須賀市 大正十一年（一六二五）（大略図10）

横須賀市 寶永二年春（一六二五）（大略図9）

横須賀市 寶永二年春（一六二五）（大略図8）

横須賀市 寶永二年春（一六二五）（大略図7）

横須賀市追浜南町にある良心寺には、朝倉能登守夫人の塔という

石造宝篋印塔がある。この宝篋印塔は、寺の山門を入つてすぐ左手

にある鐘樓の裏から山道を登つた中腹に立っている。良心寺にこの

墓のあることは、古くから知られており、「新編相模国風土記稿」

に次の記載がある。

能登守は当時の領主なり。（中略）其妻女は天正十一年六月

十二日に卒す。法名を大悲院法善良心と号す。寺院号は即是

をとりて名づく。境内に墓あり。

また、最近では、「横須賀の文化財」や「横須賀雑考」に紹介され

ている。山中賦によつても、重宝。同賦の著者の朝倉氏に大略

この宝篋印塔は、基礎の正面に、正勝親王其妻能登守の御

一当寺建立の御所と記され、巨患の夫人とある。大出入意。

大出入意。

大悲院殿、すへての器々墓に對し、関東津波の事、

法善良心大師

朝倉能登守奥

天正十一年未六月十一日

と銘文が刻まれているが、年号は能登守夫人の没年月日を記したも

ので、この塔がその直後に造立されたものとしては、宝篋印塔の形

式から見ると疑問がある。そこで、同じ形式を持つ他の宝篋印塔と

比較、検討することにした。大略図11、大略図12、大略図13、

大略図14、大略図15、大略図16、大略図17、大略図18、大略図19、

大略図20、大略図21、大略図22、大略図23、大略図24、大略図25、

大略図26、大略図27、大略図28、大略図29、大略図30、大略図31、

大略図32、大略図33、大略図34、大略図35、大略図36、大略図37、

大略図38、大略図39、大略図40、大略図41、大略図42、大略図43、

大略図44、大略図45、大略図46、大略図47、大略図48、大略図49、

大略図50、大略図51、大略図52、大略図53、大略図54、大略図55、

大略図56、大略図57、大略図58、大略図59、大略図60、大略図61、

大略図62、大略図63、大略図64、大略図65、大略図66、大略図67、

大略図68、大略図69、大略図70、大略図71、大略図72、大略図73、

大略図74、大略図75、大略図76、大略図77、大略図78、大略図79、

大略図80、大略図81、大略図82、大略図83、大略図84、大略図85、

大略図86、大略図87、大略図88、大略図89、大略図90、大略図91、

大略図92、大略図93、大略図94、大略図95、大略図96、大略図97、

齊藤 朝倉能守夫人墓石造宝篋印塔の造立年代について

げることが出来る。

一、北条氏綱の時代に活躍し、弓馬の達人であった犬也入道。⁽⁶⁾

二、豊臣秀吉の小田原攻めの際、玉縄城主北条氏勝に従って箱根山中城にたてこもった重信。同城の落城の時入道して犬也。⁽⁷⁾

三、北条氏の没落の後、結城中納言秀康に仕えた景隆。後入道して犬也。⁽⁸⁾

しかし、いずれも入道して犬也と称している点に疑問があり、どの能登守が良心寺に夫人の墓がある人物に当たるのかは、今後の検討が必要である。

3.

良心寺の朝倉能登守夫人墓塔に近い形式を持つ宝篋印塔を、三浦半島で捜すと、次の例がある。

横須賀市	盛福寺	元和八年塔（一六二二年）	（実測図7）
鎌倉市	安養院	元和九年塔（一六二三年）	（実測図3） ⁽⁹⁾
横須賀市	盛福寺	寛永元年塔（一六二四年）	（実測図5）
鎌倉市	大宝寺	寛永二年塔（一六二五年）	（実測図6）
鎌倉市	安養院	寛永三年塔（一六二六年）	（実測図10）
鎌倉市	大宝寺	寛永七年塔（一六三〇年）	（実測図11）
横須賀市	自得寺	寛永九年塔（一六三二年）	（実測図12）
逗子市	海宝院	寛永十三年塔（一六三六年）	（実測図13）

横須賀市 塚山公園 三浦按針墓塔 （実測図4）

横須賀市 盛福寺 年代不明塔 （実測図9）

以上のように、記年銘のある塔はすべて、江戸時代初期の年号を持っている。なお、寛永十年以降の塔は、数多く見ることができ、ここでは、一例として海宝院寛永十三年塔だけをあげておいた。

4

前項であげた十基の宝篋印塔によって、江戸時代初期の宝篋印塔の特徴を各部分に分けて述べて行くが、中世の関東形式及び関西形式の塔とも関係があるので、両形式の参考資料として、次の二基をあげておく。

川勝政太郎「石造美術入門」所載の関西形式塔（実測図1）

鎌倉市 坂間氏蔵 文保元年塔（一三二七年）（実測図2）

〔基壇〕基壇は中世の関東形式の塔ではすべての塔にあり、宝篋印塔の一部分になっている。上部は反花座を作り、側面は輪郭を巻き中央に束を立てて二区に分け、その内部には格狭間を現わす塔がある。関西形式の塔では、基壇のある塔とない塔があり、上部は反花座を作るが、側面は無地のままで、関東形式の基壇と比較してその厚味が少ない。

江戸初期の塔では、すべての塔が基壇を持つ関東形式であるが、

その形は上部が反花座で側面が無地の関西形式が多い。三浦按針墓塔だけが関東形式の側面を二区に分けた基壇を持っている。反花座は、すべての塔が一つの側面の中央に一弁と左右に各一弁があり、左右の弁は他の側面の左右の弁を兼ねているので、全体で八弁で反花座を構成している。しかし、花卉の表現には差があり、はつきりとした反花を持つ塔は、

盛福寺元和八年塔・盛福寺寛永元年塔・三浦按針墓塔の三基で、

大宝寺寛永二年塔・安養院寛永三年塔・盛福寺年代不明塔の三基では、やや簡単な反花になっていて、

大宝寺寛永七年塔・自得寺寛永九年塔・海宝院寛永十三年塔の三基では、更に簡略化された反花の表現が行なわれている。

〔基礎〕 中世の関東形式の塔では、上部を二段の段型とし、側面は基壇と同様輪郭を巻いて二区に分けている。関西形式の塔では、上部を反花にする塔と二段の段型にする塔があり、側面も輪郭を巻き一区にする塔と輪郭を巻かない塔がある。また、関西形式の塔では、格狭間を表現する場合は基礎に行なっている。

江戸初期の塔のうち、安養院元和九年塔は上部が二段の段型で側面を輪郭で二区に分ける関東形式を示しているが、他の塔は、上部が反花座で側面に輪郭を巻くが一区の関西形式がほとんどで、盛福寺年代不明塔だけは側面に輪郭を巻かない。ただ、基礎に格狭間を

表現した塔はない。また、反花座については、基壇で行なった分類と同じことが言えるが、自得寺寛永九年塔では、湾曲した面に沈線で反花を描いた最も簡単な表現をしている。

〔塔身〕 中世の関東形式の塔は輪郭を巻くが、関西形式の塔では輪郭を巻かない。

江戸初期の塔のうち、関西形式を示す塔には、盛福寺元和八年塔・盛福寺年代不明塔

の二基があり、蓮座や月輪を陰刻している。その他の塔は輪郭を巻く関東形式を示している。また、中世の塔では側面が正方形もしくはそれに近い形をしているのに対し、江戸初期の塔では、新しい年代の塔で高さが巾に較べて高い塔が現われている。

〔笠〕 中世の関東形式の塔は、下部の段型が二段で、上部の段型が七段又は五段で、最上部の段型には輪郭を巻いて二区に分け露盤を表現する塔がある。隅飾突起は二弧で輪郭を巻いている。関西形式の塔では、下部の段型が二段で、上部の段型が六段で最上部に露盤の表現はしない。隅飾突起は二弧又は三弧で輪郭は巻く塔と巻かない塔がある。

江戸初期の塔では、下部の段型はすべて二段であるが、上部の段型は、

七段 安養院元和九年塔

六段 盛福寺元和八年塔・盛福寺寛永元年塔・大宝寺寛永二年

塔・安養院寛永三年塔・三浦按針墓塔・盛福寺年代不明塔
五段 大宝寺寛永七年塔・自得寺寛永九年塔・海宝院寛永十三年塔
の三種類があり、年代が下るに従って段数が少なくなること示している。

隅飾突起は、中世の塔に比較して、上に行くほど外に開く形をしているが、すべての塔が輪郭を巻く関東形式である。また、安養院元和九年塔は三弧で最下の弧は変形し、上部段型最下段の装飾化しているが、その他の塔は二弧で、下の弧は安養院元和九年塔と同様装飾化している。なお、海宝院寛永十三年塔では、弧と弧の間の茨部が渦巻となって隅飾突起の内部装飾になっている。

〔伏鉢〕 中世の両形式では、高さの低い伏鉢であるのに対し、江戸初期の塔では巾と高さが同じに近い高い伏鉢になっている。更に、海宝院寛永十三年塔では、伏鉢の上部から四方に蓮弁をさげて、本来の伏鉢の意味を失った装飾化が行なわれている。

〔請花〕 請花は九輪をはさんで上下に二個作られているが、中世の塔に較べて江戸初期の請花は形式的になっている。すなわち、江戸初期の塔では、下部の狭い部分から急に巾が広がり、途中から上までは同じ太さの単純な形になり、海宝院寛永十三年塔では、下から上に向かって広がった新しい形をしている。なお、大宝寺寛永二年塔では伏鉢の上の請花の表現を省略している。

〔九輪〕 中世の両形式の九輪は上部のやや細い円筒に一定の深さと巾を持った沈線で正確に表現されているが、江戸初期の塔は、ドーナツを積み上げた形で独得な九輪の表現をしている。ただし、大宝寺寛永二年塔は、沈線だけで簡単に現わしている。

また、輪の数についても、

九輪 盛福寺寛永元年塔・三浦按針墓塔

七輪 大宝寺寛永二年塔

六輪 盛福寺元和八年塔・盛福寺年代不明塔

五輪 安養院寛永三年塔

四輪 大宝寺寛永七年塔・自得寺寛永九年塔・海宝院寛永十三年塔

と、年代が下るに従って輪数が少なくなる傾向を示している。

〔宝珠〕 中世の二形式の塔が、いわゆる疑宝珠の形をしているのに対し、江戸初期の塔では頂部が非常に発達し、大きな三角帽子ののせた形になっているが、ほとんどの塔で三角帽子の上部を欠失してしまっている。ただ、盛福寺寛永元年塔の頂部は上がまるみを持った円筒形で高さは低い。また、自得寺寛永九年塔と三浦按針墓塔とは、頂部が完全に欠失していて、その形を知ることではない。

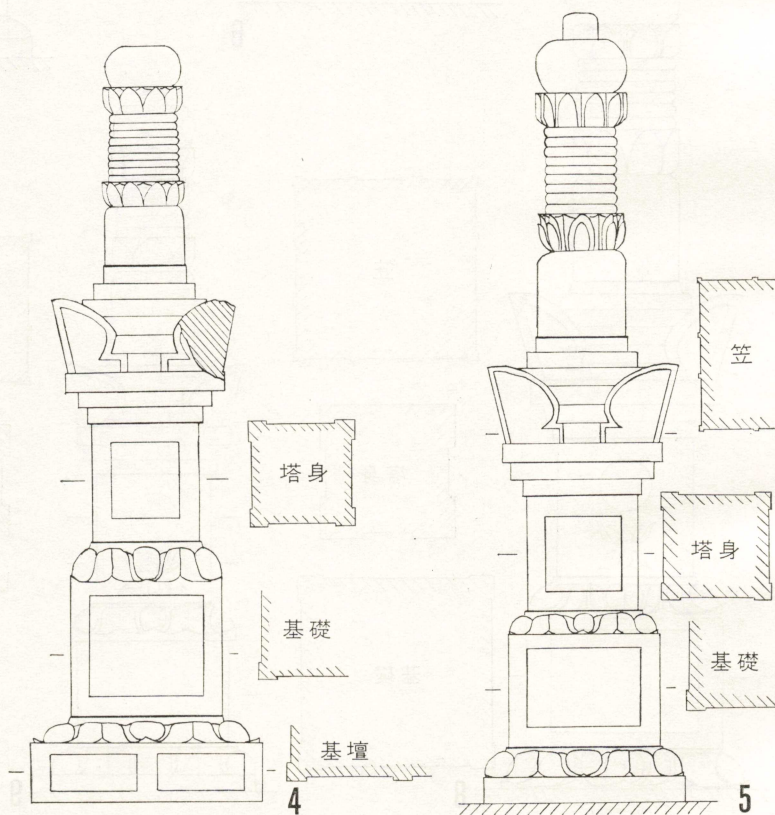
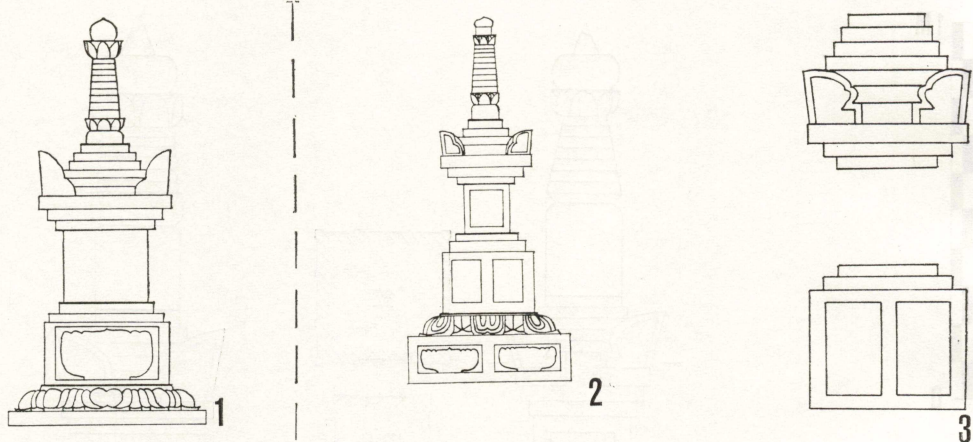
以上述べて来たように、江戸初期の宝篋印塔は、中世の関東形式及び関西形式の両者の特徴を、各部分にわたって受け入れ、更に、ある部分では簡略化を行ない、また、別の部分では装飾化を行ない

齊藤 朝倉能守夫人墓石造宝篋印塔の造立年代について

ているため、少し拡大して考えると、安養院寛永三年塔より古い形式を多くの部分で示し、安養院元和九年塔より新しい形式であるので、元和末年から寛永三年までの間に造立されたものと考ええる。

註

- 1 「横須賀の文化財」(横須賀市教育委員会編 昭和四十三年)と「横須賀雑考」(横須賀文化協会編 昭和四十三年)とは同一記載。
- 2 「横須賀の文化財」及び「横須賀雑考」では、銘の位置を裏としているが現在では正面にある。また、「大旦主」を「大具主」「六月十一日」を「資十一月」と記しているが、筆者の所見では、「大旦主」「六月十一日」と認められた。
- 3 「新編相模国風土記稿」・「三浦古尋録」・「相中留恩記略」による。
- 4 岩崎義朗「相模国三浦半島の古文書について(四)」(横須賀市博物館研究報告 人文科学 第七号 昭和三十八年)
- 5 「統群書類従」では「朝倉」を「牧倉」「浦郷」を「浦江」としているが、北条萬八氏所蔵の写本では「朝倉」・「浦郷」になっている。
- 6 「北条五代記」『犬也入道弓馬に達者の事』の項による。
- 7 「関八州古戦録」『北条家軍評定付山之城守兵事』及び、『上方勢攻落山之城事』の項による。
- 8 「新編相模国風土記稿」による。
- 9 現存するのは、基壇・基礎・笠のみであるが、基壇は別のもの。

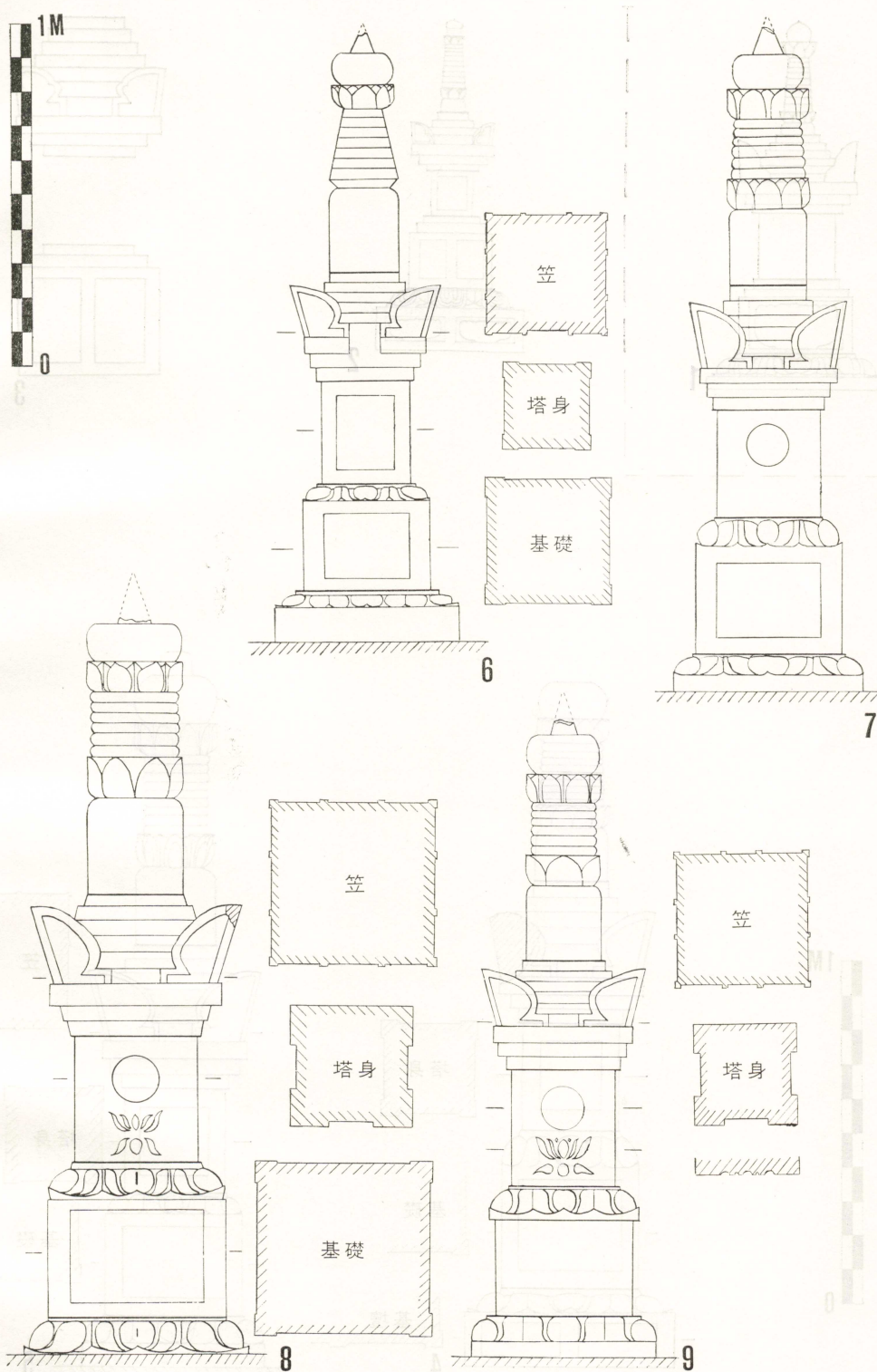


1. 中世の関西形式例(川勝政太郎「石造美術入門」所載)

2. 中世の関東形式例(鎌倉市 坂間氏蔵 文保元年塔) 3. 鎌倉市安養院 元和九年塔

4. 横須賀市塚山公園 三浦按針墓塔

5. 横須賀市盛福寺 寛永元年塔

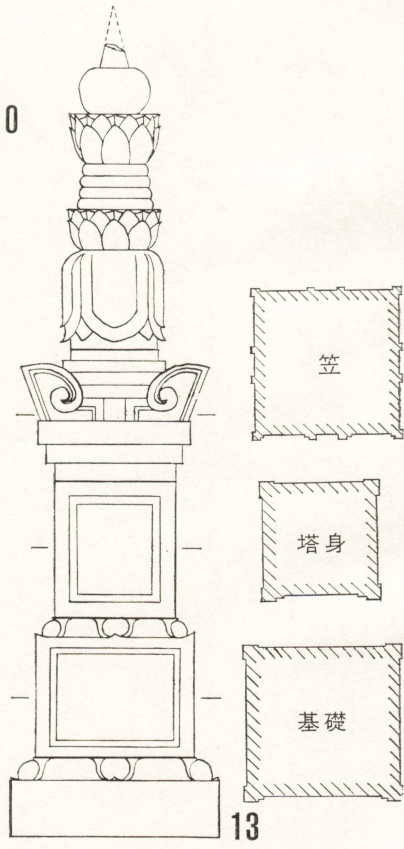
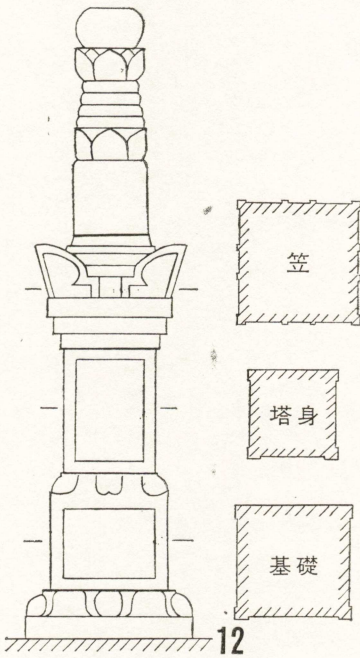
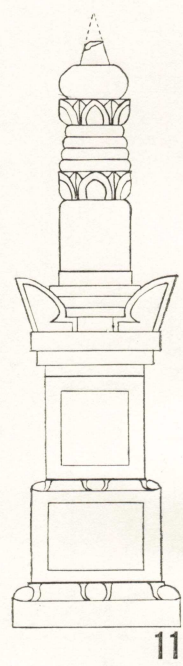
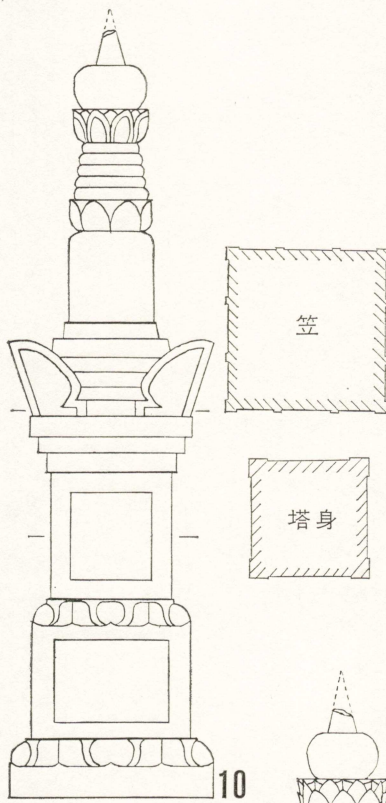


6. 鎌倉市大宝寺 寛永二年塔

7. 横須賀市盛福寺 元和八年塔

8. 横須賀市良心寺 朝倉能登守夫人墓塔

9. 横須賀市盛福寺 年代不明塔



(9)

10. 鎌倉市安養院 寛永三年塔
12. 横須賀市自得寺 寛永九年塔

11. 鎌倉市大宝寺 寛永七年塔
13. 逗子市海宝院 寛永十三年塔